

授業で、大学で、そしてフィールドでアクティブラーニング。 SGH 関高だからこそ、できることがあります。

主体的に課題を発見し、チームの力で解決する。プロセスや成果、新たな課題を自ら発信する。グローバル社会では、そんな力が求められています。

そうした力を身につける学びの手法がアクティブラーニング。当然、大学でも企業でも、アクティブラーニングで身につけた力が必要とされます。SGH 関高では、さまざまな場面を生かしてアクティブラーニングを実践し、入試改革や大学改革に備えています。

関高の授業では、積極的にアクティブラーニングを導入しています。授業以外にも、大学と連携した講義や実験講座、セミナーも盛んです。さらに進んで、さまざまなフィールドワークも実践しています。課題発見、ディスカッション、成果の検証、プレゼン発表。関高生には多様な力を身につける機会が豊富にあります。

東大、京大、阪大をかわきりに、大学個別入試も大きく様変わりします。入試にもアクティブラーニングで得た力が問われるようになります。大学でも企業でも、求められる力は、主体性、課題解決能力、プレゼン力、提案力。SGH 関高で、新時代に切り開く力を身につけてみませんか。

以下、関高で実践しているアクティブラーニングの事例を紹介します。

中京大学・坂田隆文教授のアクティブラーニング基礎講座

商品企画「高校生に売れる筆箱」にチャレンジ！



グループごとに企画を発表。緊張の瞬間。



坂田教授とのグループ懇談。

1年生全員でとりくむアクティブラーニングのテーマとして、「高校生に売れる筆箱」の企画にチャレンジ。チーム分け、チームビルディング、企画立案、企画内容の発表、評価・講評、クラス代表選出というステップで、最後にはプレゼン大会を行い、最優秀企画賞を決定します。中京大・坂田ゼミの指導・支援を受けながら、1年生全員で取り組みます。

フィールドワークを通じたアクティブラーニング その1

礼文島の地形踏査と英語レク、そしてディスカッション



トレッキングによる地形踏査

島を横断するトレッキングを通じ、地形の踏査を行いました。礼文島の山々は、一面チシマザサなどの草におおわれていて樹木はまばら。遠浅の砂浜のすぐ近くには淡水湖。切り立った崖が続く西海岸。見慣れぬ光景に驚きながら歩き続けます。



研究者による英語レク

環境科学者ステファニー・ミュラー先生(ドイツ出身、北大助教)の英語の講義を聞きました。ステファニー先生は、淡水湖の湖底堆積土の分析を行い、1万数千年前から近年までの自然環境の変化を追っています。早口の英語の講義にはびっくりしましたが、最後まで粘り強く聞き続けました。



思い切って英語で質問！

今回の調査の公用語は英語。黙っていたら何も解決しません。レクの内容で疑問に感じたことや、もっと知りたいことを、思い切ってステファニー先生に質問してみました。話し始めると不思議と話が弾み、会話が進みます。失敗を恐れず思い切って話すことの大切さがよくわかりました。



ミーティングでディスカッション

その日あったことは、ミーティングで情報交換。勘違いや不明な点を確認しながらの情報共有は、共同研究の基本です。疑問に思ったことは積極的に質問しあい、今後の研究方針も話し合っ決めていきます。この日は、トレッキングの成果や疑問点と、ステファニー先生の講義内容を比較検討し、自分たちなりの考えをまとめてみました。

アクティブラーニングはチーム力が決め手。

フィールドワークを通じたアクティブラーニング その2

霊長類フィールドワーク ～レクと行動観察～



読書、講演会、そして談話会

松沢哲郎先生(京大霊長類研究所教授)の著書「想像するちから」を読み、講演会に参加しました。「虐殺の成り立ち」というショッキングなテーマの講演を聞いたあと、先生との談話会に参加しました。研究者と直接話すはじめての機会。緊張からはじまりましたが、楽しいひと時を過ごしました。



日本モンキーセンター(JMC) & 京大霊長研

JMCと京大霊長研で一日野外実習。4種の霊長類の体形や動きを観察しながら、生息環境との関わりを類推するフィールドワークを行いました。生物多様性や環境問題のレクも受講、自然環境と人間の共存について考えるきっかけとなりました。



東山動物園でフィールドワーク

竹之下祐二先生(中部学院大准教授)の指導を受けながら、ニシローランドゴリラの行動観察にチャレンジ。5人のゴリラ家族の行動を、目的や方法を定めて行いました。最初は戸惑いましたが、楽しみながらやれました。続けているうちに新たな課題が次々と浮かんできます。



ミーティングでディスカッション

新たな課題をどう解決するか。チームで話し合いをします。研究指針、方法、役割分担を決め、さらに観察続行。そしてまた新たな課題が。生徒の自主性を重んじる竹ノ下先生。知恵を絞る生徒たち。話し合いのリーダーシップをとる人、それをサポートする人。さまざまな意見が飛び出しました。研究はまだまだ続きます。

ハプニング連続のフィールドでは、判断力やチーム力が不可欠です。

学際研究・異分野融合の最前線に学ぶ

英語、ICT、異分野融合。最先端では当たり前です。



考古学者のレクから

佐藤孝雄先生(慶応義塾大教授)より、礼文島で出土した動物骨の研究成果を学びました。先生は、解剖学や動物生態学の分野にも明るく、文系に属する考古学でも、理系の知識が当然のように必要であることがわかりました。



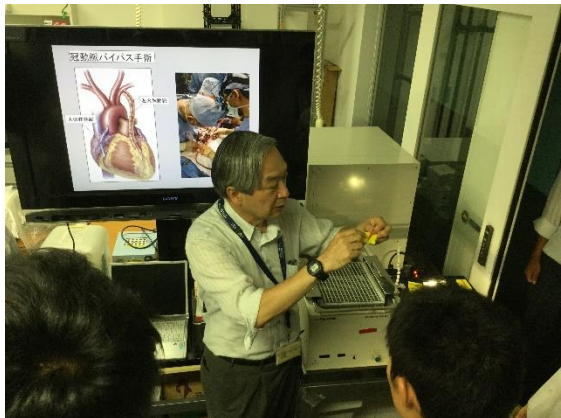
歴史学者のレク、そして考古学者との討議

蓑島栄紀先生(みのしまひでき、北海道大准教授)より、文献研究からみた北海道、北方交易のことを学びました。慶応大の佐藤先生も参加、活発な議論が交わされました。考古学と歴史学の異分野が協力することにより、新たな歴史像が浮かび上がる、そんな場面を目の当たりにしました。



福祉と工学のドッキングでバリアフリーを

巖淵守先生(東大先端研准教授)は、今あるテクノロジーを役立てる「あるテク」を提唱し、重度身体障がい者の生活支援システム「どこでもスイッチ」を開発。講義室でのデモで、空間にいきなりスイッチが登場するしぐみに一同びっくりしました。



医療と工学の連携で人工臓器・血管が登場

早稲田大先端生命医科学センターで、梅津光生先生(所長、教授)から、医学と工学が連携して開発する人工臓器・血管のしぐみを聞き、一同驚きました。さらにその研究施設で学ぶ関高の先輩(長谷部有洋さん)に会い、最先端の研究についてうかがいました。

関高SGH、まずは旺盛な知的探究心から。

大学でも企業でも、高いコミュニケーション能力が求められる時代です。

話しかける勇気もてるかどうか大切です。

日本語で、英語で、思い切って話しかけてみました。



東大名誉教授にズバリ質問！（8月6日）

テレビキャスターとしても著名な御厨貴（みくりやたかし）先生に、18歳選挙権や昨今の時事問題について、ズバリ質問してみました。関高生の「直球」に、先生は「なるほど、わかりました。答えましょう」と、明快な回答をくださいました。

礼文島で発掘調査体験！（8月20日）

はじめての発掘。何が出てくるのか、緊張の瞬間。やがて動物の骨らしき出土品が…
いったい何の骨か、いつの時代のものか。出土遺物はどうやってあつかってよいのか。
思い切って、英語で聞いてみます。
相手はハーバード大院生のゾイ・エディさん。
親切に教えていただきました。

